

— 広告 —

KIT
キャンパス
レポート
文・出島二郎
マーケティングプランナー



納祐一 (おさめ ゆういち)
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
兵庫県立洲本高等学校出身

細胞を育てるのが面白い。 でも実験は試行錯誤の連続です。

大学は知らない町で生活してみたいと思う人は多いだろう。淡路島出身の納さんも関西圏以外の大学を志望し、関東の二つの大学の推薦試験に受かっていた。しかし、受験勉強の成果を試してみたいと、三年間担任の化学の先生が強く薦めてくれた金沢工大の後期試験を受験。応用化学と応用バイオの二学科に合格し、前者を選択した。

「金沢ってどこだ?という感じでしたが、最後まで勉強して勝ち取ったという実感を大事にしたかったです。学部一年の研究室見学の時に大澤先生の研究室に興味を持ったものの、入るのが難しいと修学アドバイザーの先生に聞いて、ダメかなど。でも三年次の見学で、やっぱりやりたいから第一希望と書きました。」

大澤敏教授は金沢工大の学長である。以前、学生と接するのが楽しくて仕方がないと聞いたことがあり、週に一回は学生を指導する。専門は生分解性プラスチック、環境調和材料、医用材料、高分子化学など。日々の指導は愛弟子の谷田育宏准教授が担当する。

「ぼくの研究テーマは、『L・リシンの添加によるキトサンナノファイバー多孔質体再生医療材料の機能向上に関する研究』です。骨芽細胞など研究室にある三つの細胞を自分の手で育てるのが面白い。でも足場材料の上では育たないこともあり、そこが難しい。実験では再現性が一番重要で、何回も何回も、試行錯誤の連続ですよ。」
納さんは研究室配属の時から、金沢医科大学との医工連携プロジェクトに参加している。金沢工大では扱えない細胞や特殊な設備があり、納さんが作った足場材料を提供して実験してもらっているの

だ。他にも他大学との交流事業やオープンキャンパスの企画など、頼まれて面白いと思えば引き受けてしまう性格である。

「就職は金沢の澁谷工業に内定しました。最初はボトリングシステムのメーカーだと思っていたんですが、説明会やインターンシップに参加し、再生医療の分野でバイオシステムに力を入れていると知りました。金沢工大のOB・OGも多いけれど、何より現場でロボット細胞培養システムの機械を見て、すごい機械を作っている!と。それが決め手でしたね。」

何事も最終決定をする時には納さん独特の感性が働くようだ。金沢工大で研究テーマを見つけ、社会人として金沢から世界を見る。いろんな出会いをどのように自分の財産にしていくのか、楽しみだ。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七二
電話番号(076)248-1100